

国文研ニュース

No.49
AUTUMN 2017



〔業平涅槃図〕

目次

●メッセージ

本文研究の近未来と集積の意味と……………横井 孝 1

●研究ノート

「近世職人尽絵詞」影印・注釈の出版……………大高 洋司 2
道成寺文書概観 -特に「縁起」をめぐる資料について-……………大橋 直義 4
ホノルル美術館リチャード・レイン コレクションの「鉢かづき」……………小林 健二 6

●トピックス

〈日本バチカン国交樹立75周年〉
研究集会「バチカン図書館所蔵切支丹関係文書の魅力を探る」……………大友 一雄 8
特別展示「伊勢物語のかがやき -鉄心斎文庫の世界-」関連のお知らせ……………恋田 知子 9
日本文学資源の発掘・活用プロジェクト始動……………小山 順子 10
子ども霞が関見学デー……………宮間 純一 10
津軽デジタル風土記、はじめの一步 -調印式・記念講演レポート-……………木越 俊介 11
第41回国際日本文学研究集会プログラム……………12
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……………14

本文研究の近未来と集積の意味と

横井 孝（国文学研究資料館学術情報委員、実践女子大学教授）

2008年は「源氏物語千年紀」であり、時宜にかなっていただけいか、同年6月7日（土）に中古文学会関西西部会主催で行われたシンポジウム「大島本源氏物語の再検討」は大盛況で、会場の京都市文化博物館の旧館は満席の状態だった。ところがその6年後の2014年11月15日（土）、第二弾として企画されたシンポジウム「源氏物語 本文研究の可能性」は、当代の俊秀が名を列ねたにも拘わらず、かなりの空席があった。前回のような一般客の参加をのぞみにくい会場（佛教大学二条キャンパス）だったということもあろうが、各パネリストの発表内容が河内本・別本・定家本と拡散して、大島本の時のようなテーマの絞り込みが乏しかったせいも、やや盛り上がりには欠けた。

これは単なる既視感ではないのだろうが、先達も同様の体験をしていたという。先ごろ物故した野村精一が「本文研究の近未来—系統論だけが本文研究ではない、といふこと」（『日本古典文学会会報』No.122、1992年7月）のなかで、1992年の中古文学会の有様をもとに慨嘆している。「本文研究のところで、聴衆が減ったということの意味は、考え直してみると、いささかおそろしい」——と。

野村は、研究者の間に「さまざまな活字本……あらゆる資料が、既にととのえられ、それさえよめばあらゆる研究が可能だ、という幻想」があることを指摘し、その「幻想」の持ち主が多数派を占め、「せつせと源氏物語論や紫式部論を生産している」現状のうそ寒さを指摘する。さらに野村は、先人たちが「必要に応じて自らその本文研究に従事した」に過ぎず、「真の源氏物語研究とは、この本文研究を必然的に伴うものなの」であり、それを他者に依存することの不毛を指弾したのである。

しかし、——2017年の現在、野村の指摘した段階よりも事態はさらに深刻化している。多数派の人々は小学館の新編日本古典文学全集からほとんど一歩も出ない有様。大島本が一写本として論の俎上にのぼったのは、はるか過去に思えるような状況なのだ。中古文学の研究といえどもこれも源氏物語という状況を「源氏帝国主義」と称する向きがかつてあったが、その伝でいえば、今はまさに「新編全集帝国主義者」の時代なのではないか。

専門家を名のるのであれば、新編全集の前身・日本古典文学全集の場合でも、版ごとに校訂本文が揺れていたこ

とを知らぬ者はあるまい。『源氏物語の本文』（岩波書店、1986年）の著者でもある阿部秋生が校訂の責任者として、本文を検討しつつ書いていたからである。現代の活字本ですら揺動しているとしたら、拠るべき本文とは何かを考えずに他者に依存したまま平気でいられるとしたら、その「研究」と称するものは一体何なのだろう。

近年、私どもは専門家の指導を受けながら、所属する大学で源氏物語の古筆切を収集している。大仰に公表するほどの分量ではないが、意外なほど鎌倉期の断簡が多いという印象なのである。しかもその内容は、別本としかいいようのない、多様な本文であることが少なくない。断簡零墨のたぐい、源氏物語の研究者たち、とくに多数派の方々にはほとんど無視される体ものだが、根気よくツレ（共通の写本からの断簡）を集積してゆくと、かなりの質量になってくるものである。たとえば伝藤原為家筆大四半切とよばれる河内本の断簡は資料館蔵を含めて、薄雲の巻だけでも四割ちかくの本文を復原することができる。他の古筆切においても、ほんの数丁でも復原できるならば、鎌倉初～後期という時期に多様な本文で源氏物語が読まれていたことがわかってくるはずだ。その結果、平成の世の本文としかいいようのない活字本本文で「せつせと源氏物語論や紫式部論を生産している」ことに恐ろしさを感じない、というのはあまりに鈍感なことなのではないだろうか。

もとより、研究対象が大長編の物語であるのに、バラバラの紙片のごとくに何が可能かという反論が出るであろうことは容易に予想がつくし、写本の検討ですらいまだに十分ではないのに、ともいえよう。しかし、古筆切研究が確実に地歩を固めつつある現状は、既存の写本研究における閉塞感との反比例に見える。現に、古筆切を丹念に収集し復原を試みることは気の遠くなるような作業ではあるが、着実にある程度の成果が期待できる分野というべきではないか。ただ、予算がごく限られた一部局の仕事には限界がある。地道な資料収集、諸方面に散在するデータの集積と分析、そして所蔵機関との連携などの活動は、国文学研究資料館にとってお手のものではないか。文学研究に必然的であるはずの本文研究の近未来に対して、国文学研究資料館の果たすべき役割は今後増大こそすれ、減殺する要素など全く考えられないのである。

「近世職人尽絵詞」影印・注釈の出版

大高 洋司（国文学研究資料館名誉教授）



【図版 1】

私も通称「都市風俗画研究会」の手がけた『鉄形蕙斎画 近世職人尽絵詞 江戸の職人と風俗を読み解く』が出版された（勉誠出版、2017年2月）。

「都市風俗画研究会」は、国立歴史民俗博物館の小島道裕・大久保純一両教授と国文学研究資料館に所属していた大高が中心となり、日本中世近世の絵画資料を幅広く検討することを目的とした研究グループである。人間文化研究機構・総研大から援助を受けながら、10年近く大学院生を含む両館及び外部の研究者延べ30名ほどが自由に出入りして活動を続けてきたが、出版を機に一まず区切りを迎えることになった。

鉄形蕙斎画「近世職人尽絵詞」（東京国立博物館所蔵）の本格的な注釈作業に取りかかったのは、平成12年3～5月の人間文化研究機構連携展示「都市を描く－京都と江戸」（歴博・国文研同時開催）で、「絵詞」全三巻のうち二巻を国文研会場に展示（残り一巻は国立国会図書館所蔵の模本による）させていただいてからのことである。「絵詞」は江戸時代後期の〈江戸〉の町を描いた絵巻物の傑作として知られ、本の挿絵やテレビなどメディアに登場する回数も少なくないのだが、展示に先立つ調査で東博にうかがった際に原本の放つオーラに圧倒されたことが、本作をもっと良く理解したい欲求に火を点けた要因だったように思う（その時

のことは、本書の小島教授「解説」にも触れられている）。それから5年間、ほぼ月に一度ずつ会場を回り持ちしながら各画面の解説（「会読」と称していた）に出精した成果が、東博で新たに撮影してくださったフルカラーデジタル画像（外函・巻姿を含む）を用い、出光文化福祉財団の助成をいただいて公刊できたことは、望外の喜びとしか言いようがない。

「近世職人尽絵詞」は、文化三年（1806）頃までに成立したと見られる。担当した絵師はもと浮世絵師北尾政美で、備中津山藩松平家に抱えられて鉄形蕙斎と改名した。詞書は上巻を四方赤良（幕臣大田南畝）、中巻を手柄岡持（秋田藩の臣、黄表紙作者朋誠堂喜三二）、下巻を戯作者山東京伝が担当している。各巻冒頭の右端下部に松平定信所蔵を示す「楽亭文庫」の朱印が捺され【図版1:上-1「大工」】、制作を命じたのも定信の蓋然性がきわめて高い。日本美術史研究では中世の〈職人尽絵〉を継承発展させた作と見なされ、斯学の大家石田尚豊氏による「職人の躍動する行動の瞬間をとらえて本質に迫る」（『日本の美術』132『職人尽絵』、1977）という言葉が現在の評価を代表するものと考えられるが、これに続く新しい研究は必ずしも活発とは言えないようである。手前味噌をお許しいただければ、それは、「絵詞」のもつスケールが美術史研究の枠に収ま

り切らないからではなかろうか。逆説的な言い方になるが、美術史研究者はもちろんのこと、中世近世の歴史研究者、同じく文学研究者、民俗学研究者、書物史研究者を含む私ども「都市風俗画研究会」のメンバーは、それぞれの立場から「近世職人尽絵詞」の内実に触れて飽きることがなかったのである。朝倉治彦氏解説『鉄形蕙斎 江戸職人づくし』（岩崎美術社、1980）が、モノクロのテキストながら、研究期間を通じて常に「絵詞」全体の把握に役立ったことも特筆しておきたい。

本書を通じて、「近世職人尽絵詞」の理解に私どもが新たに付け加えたと考えていることのうち、やや大きな点を要約して申し述べたい。

1. 「絵詞」の詞書には、『七十一番職人歌合』（16世紀初頭成立）をはじめとする〈職人歌合〉の詞章が意識され、少なからず踏まえていること。〈職人歌合〉は〈職人絵〉を伴う中世以来の文芸様式で、近世期にも『七十一番』など古い〈職人歌合〉の絵巻及び刊本が流布しているが、典拠関係が明らかになったことで、「絵詞」が中世〈職人尽絵〉の伝統に連なっているという石田氏の言葉が実証された。

2. 大久保教授の「解説」によって、「絵詞」の特異な画風は「蕙斎の画名をもっと世に広め」た「略画式」の画風を採用したものと指摘されたこと。事実、その後シリーズ化される「略画式」の第一作『略画式』（寛政七年〈1795〉刊）から、10ヵ所以上が「絵詞」の粉本として用いられている。

3. 1・2は、絵師・詞書作者が「絵詞」の注文主と考えられる松平定信の意向を受けたためと推定されること。定信は、伝統を踏まえながら当世風俗を〈俳諧〉的に描き出すことを望んで、当時最高の俗文学の担い手である3名と、浮世絵師出身でこの人々に近い蕙斎に「絵詞」の制作を命じたのではなかろうか。

4. 3で触れた定信の意向(推定)は、小島教授が著書『洛中洛外図屏風 つくられた(京都)を読み解く』(2016)で、権力者が見たい京都を描いた絵とされた、「歴博甲本」など洛中洛外図屏風のあり方に通じていること。「絵詞」は、たんに庶民風俗を巧みに描いたものというばかりではなく、時の政治的権力と文化の関係について、時代を超えた視点を提供している。ただし、「絵詞」や洛中洛外図屏風の制作者たちは、たんに権力者に奉仕する抑圧感ばかりでなく、その時代において最高のものを作り上げようとする緊張感と高揚感をもって作業に取り組んでいたと想像する。

しかし、上記のような見方にたどり着いたのはあくまでも結果であって、私どもが日頃感じていたのは、複数の眼を通して少しずつ見えてきた「絵詞」各場面の細部の面白さである。三巻について、一例ずつをあげてみる。

上-17「銭湯」:髪をとかす男の頭に向けて、画面右上方から斜めに細い線が引かれている【図版2】。これが蕙斎の失策ではなく、風呂屋で備えた共用の櫛に付けた紐の描写と知った時にはほんとうに驚いた(本書真島望氏コラム参照)。ちなみにこの線は国会模本では描かれていないが、そうした見落としが起るほど微妙な線なのである。



【図版2】

中-14「歌舞伎興行」:大入りの劇場の前、右隅で笠で顔を隠す男性は明らかに役者で、首筋の三本の線と大きな鼻から五代目市川團十郎の可能性が高い【図版3】。異論もいただいているが、五世團十郎で良いとすれば、中巻が制作されたと見られる文化二年(1805)には64歳で、実際には舞台から引退していた。ここでは劇場の場面にあえて描き込むことで、〈江戸〉の象徴としての團十郎に敬意を表したものと考えたいのだが、どうだろう。



【図版3】

下-13「遊郭(吉原)」・14「岡場所(深川)」:「絵詞」の末尾を飾る大事な二画面であるが、下巻の詞書作者京伝は、ここでは『七十一番職人歌合』を模倣した擬古的な言い回しを離れて、吉原詞・深川詞を生き生きと駆使した画中詞を記している。多少の語注を介して、誰もがその場の雰囲気を楽しく味わうことのできる場面である。けれども寛政三年(1791)三月、京伝はその年刊行の洒落本三作が寛政改革に伴う風俗匡正に背いたカドで処罰され、松平定信が時の老中首座だったことも、人の知るところである。京伝はその後遊里を描く洒落本に手を染めていないのであるが、にもかかわらず「絵詞」が洒落本を彷彿とさせる内容でお開きとなっているのはなぜだろう。私個人としては、13・14を含む「絵詞」下巻

の詞書を京伝に担当させたのも、他ならぬ定信の意向によるものだったと思う。これも想像の域を出ないが、仮に両人の心中を一編の小説に仕立てるにしても、その前に、とりわけ筆を執る前後の京伝の気持ちの揺れを、繰り返し反芻してみる必要があるだろう。

以上、「会読」を通じて私どもが「絵詞」から受け取った事柄の一端をご報告したが、当然のことながら、ここに収録された100を超える職種のそれぞれについて、十分に理解が及んだわけではない。注釈欄に引いた文献によったことはもちろん、メンバーどうしで教えあい、それで分からなかった時には、現在それらの職業がどのように継承されているか、主としてインターネットで検索し、そこから得た情報を文献にフィードバックさせることを心がけた。また可能な場合には、直接その職業に携わっている方々に教を請うた。そのようなして、ともかくも「見えた」もののすべてに注をつけることを自分たちの課題としたのであるが、専門職あるいは専門研究者がご覧になったら噴飯ものの珍解釈が、随所にあることも覚悟している。まだ私どもに見えていない部分と共に、誤認を犯した箇所(すでにいくつか見つけている)について、ご批正をたまわることができれば幸いである。本書「まえがき」にも記したように、私どもの試行錯誤の上に立って、「近世職人尽絵詞」が一層「読まれる」ことを期待している。

最後に、本書「凡例」に、諸職の呼称について国会模本の「各巻の箱の蓋裏側」に貼り付けた紙に記された名称によったとしたのは、正しくは「各巻の表紙見返し部分」。原本また同館デジタルコレクションデータベースによる確認を怠った、言い訳のきかない私の誤りである。

(本文中の図版1~3は、東京国立博物館蔵 近世職人尽絵詞より)

道成寺文書概観

—特に「縁起」をめぐる資料について

大橋 直義（和歌山大学准教授）

はじめに

稿者を代表者とする共同研究「紀州地域に存する古典籍およびその関連資料・文化資源の基礎的研究」が歴史的典籍NW事業・公募型共同研究に採択されたのは2014年、同年10月から始まった3年間の研究期間も間もなく満了日を迎えようとしている⁽¹⁾。この共同研究が目標の一つとして掲げていたのは寺院経蔵文献の調査・研究という観点であった。当初の目論見としては、紀伊半島における寺院経蔵文献の実態をできるだけ広範に見わたすことを目指していたが、特に道成寺文書に重点を置き、その悉皆調査を行なうこととなった。その成果として、16年11月には和歌山大学紀州経済史文化史研究所の特別展として「道成寺の縁起—伝承と実像—」を開催し、関連する論考も公にした⁽²⁾。この小文では、それ以降に気付いた事柄のうち、特に「縁起」に関わるものについて取り上げ、若干の整理を加えておこうと思う。

道成寺文書の概要

道成寺文書の存在は早くから知られており、1977年から翌年にかけて、御坊文化財研究会が調査を行ない、その際の目録が「道成寺古文書目録」として公刊されている⁽³⁾。しかしながら、わずかに3日間で行なわれた調査であったこと、調査から目録刊行まで四半世紀の歳月を要したためであろうか、残念ながら、函単位での重複がみられるなどの不備を指摘せざるをえず、また、「覚」「定」のみを認定書名とするばかりで内容が判然としないものが多数あり、さらには法量・装訂の記載も不分明で、個々の文書と目録とを照合することが不可能な場合が多いのである。何より、近世文書函を中心に行なわれた調査であったため、幕末期から明治にかけての経済文書はもちろん、聖教・典籍の類についてはまったく取り上げられていない。その後、『川辺町史』に文書類数点が翻刻紹介されたが、そこでも重要文化財『道成寺縁起』等の主要なものを除く典籍類についての言及は皆無であった⁽⁴⁾。したがって、一度は調査が行なわれた近世文書を含め、あらためて道成寺文書全体を対象とした調査と目録の作成を行なうこととなった。

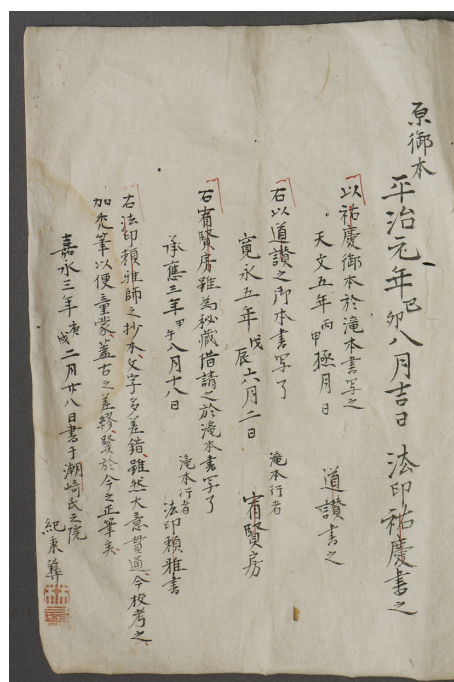
道成寺文書には、現在五八函が確認されている近世から明治初期にかけての文書函がまず数えられ⁽⁵⁾、加えて未調査の俵匭函

に納められた典籍類四〇函（仏書・漢籍・和書、大半が版本）、未調査の聖教類が数函存在している。もちろん、重要文化財の『道成寺縁起』二卷二軸と『色紙墨書千手千眼陀羅尼經』一軸（元久二年〔1205〕加點奥書）を中心に、『紀道大明神縁起』といった絵巻、掛幅絵・屏風絵などの絵画資料が数点、別置されている。

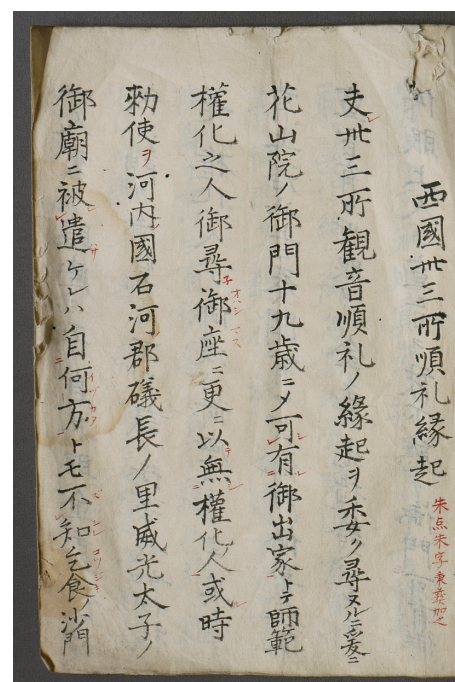
道成寺は、寺伝によれば、開山当初は法相宗、ついで真言宗となり、承応元年（1652）に紀州徳川家の影響のもと天台宗に改宗している。現在までに確認されているところでは、承応元年以前に遡る資料としては、『色紙墨書千手千眼陀羅尼經』が突出して古く、『道成寺縁起』（寺伝では応永十年〔1403〕成立、後小松天皇宸筆。しかしながら16世紀前半の成立かと目されている）、文明十三年（1481）写『大門勸進状』一軸、慶安二年（1649）真海写『本堂大修理勸進状』一軸、慶安三年写『日高郡古社寺改帳』等、数点を数える程度である。

近世道成寺の「縁起」をめぐる動向

慶長六年（1601）、紀伊国司に任せられた浅野幸長は寺領として土生村五石を寄附する。それ以後の道成寺の資産を書上げて紀伊藩に進上した文化四年（1807）写『道成寺什物書上』によれば、中世以前の「由緒記録共」は「何比歟紛失」しており「縁起別紙に認め指上申」したと伝えている。天正十三年（1585）の紀州征伐の際などに失われた可能性もあろうが、確かなことは、浅野時代以前に遡りうる「由緒記録」、一編の書物としての「創建縁起」は今に伝存していないということである。その後、天台宗に改宗したとき



【同・奥書】



【道成寺蔵「古伝口訣 西国三所順礼縁起」内題】

れる直前の慶安二年(1649)に道成寺二世真海によって著された『本堂大修理勸進状』に創建縁起説——海人が海中より拾い上げた観音像の靈験によって、その娘が美貌の女性となって文武天皇の後妃となり、勅願によって紀道成が創建したとする言説が示される。そしてこれと同時期、豪俣(天海資。比叡山双巖院住、和歌浦雲蓋院[近世道成寺本寺]三世。金峰山初代学頭。承応三年入寂)によって『道成寺御建立略縁起』が書写されるのだが、これが一書として伝来する「創建縁起」の最古の事例と見てよいだろう。

今、注目しておきたいのは、様々な局面において、近世の道成寺が「縁起」というものに大きな関心を払っていたという点である。模本を用いた絵解きの他に、紀州徳川家、諸国巡見使、聖護院門跡、三宝院門跡が参詣するたびごとに重文絵巻を披いているのももちろんだが(そもそも重文絵巻には由良興国寺において足利義昭の絵巻披見の所望に応じた際の識語と義昭花押が記されている)、その一連の次第を文書として管理・集積している点は興味深い。さらに、開帳時はもちろんのこと、現在と同様、熊野参詣・西国巡礼を兼ねた参詣者に絵解きを行っていたわけだが、その宝物を紹介する際の口上、絵解き台本を始め、記念品の販売記録(『道成寺縁起安珍清姫物語日々売高控』)等も残されている。

三世盛海代には「創建縁起」を絵巻化した『紀道大明神縁起』が近傍の紀道神社に奉納されるなど、「縁起」に関心を寄せている。そもそも、伏見稲荷、鎌倉山月輪寺、泉州堺の大阿弥陀経寺(旭蓮社)など他寺社の縁起の写本を有するだけでなく、版本・一枚ものまで視野におさめれば複数の社寺の縁起が寺内に存在しているのだが、二世真海の手跡にかかる「縁起」関連資料を列記するならば『熊野大権現和讃』『カタ栗嶋明神祝詞』『阿多木権現祭祀』『神楽之事』『吉田八幡宮遷宮表白』等を挙げることができる。特に吉田八幡社の麓に存する九海士王子社は、「創建縁起」が書物化される過程において、海人を祀った場として理解されていた。また、天台宗に改宗する直前の慶安三年(1650)には『日高郡古社寺改帳』が編まれ、興国寺を始めとする日高郡の寺社の縁起、当時の状況が示されている。このような動向は、近世の道成寺が「縁起の寺」として変容してゆく過程のただ中に起こったことであった。

西国順礼縁起

これまでに言及されたことはなかったが、道成寺には『西国順礼縁起』が二本伝存している。

一本は〔近世後期〕写『西国三拾三処順礼縁起』継紙一軸(後欠)である。長谷寺本願院より近世に開版された『西国順礼縁起』(至徳元年[1384]本奥書)や花園大学図書館蔵一軸(元禄十年[1697]長谷寺より寄進識語、宝永二年[1705]書写奥書)と近い本文を有する。

いま一本は、嘉永三年(1850)紀乗彝写『古伝口訣 西国卅三所順礼縁起』一冊である(既存文書目録に言及無)。

西国順礼縁起には、特に室町時代に流布したと推定される、「威光上人冥界訪問譚」を有するものが存在する。慶應義塾大学図書館蔵『卅三所観音之縁記』(一冊、大永六年[1526]奥書、〔近世前期〕写)、松尾寺蔵『西国三十三所巡礼縁起』(一軸、天文五年[1536]写、同十一年寄進識語)、大東急記念文庫蔵『西国順礼縁起』(一軸、〔室町後期〕写)がそれである。道成寺本は、「威光上人冥界訪問譚」を持たないものの、それ以外の本文はこれらの伝本に極めて近く、特に真名書きの大東急記念文庫蔵本が依拠したと推定される仮名書き縁起と深い関わりがあるものと考えられる。むしろ大東急本の誤解・無理解を補うという点で注目すべきものである。

そのような室町期的本文を有する本書に図版のような奥書が示されている点が重要である。「平治元年」の本奥書は眉唾物であるとしても、松尾寺本の奥書と同じ天文五年に「道讚」が書写したとすること以降は信憑性が高い。この「道讚」は15世紀前半に那智・滝本執行を務めた道讚⁶⁾と同一人物である可能性はないだろうが、「宥賢房」「(花巖院)頼雅」はいずれも滝本行者に関わり、この本が書写された「潮崎氏之院」とは長く滝本執行を務めた尊勝院を指す。つまり、この種の室町時代西国順礼縁起の本文が那智山滝本行者と深く関わる事が明らかとなる。

では、なぜ、この本が道成寺の近世文書函内に存していたのか。その理由は明らかにはならないが、ひとまずは熊野本山派修験の関与といったことを考えておきたい。

〔注〕

(1) 東悦子・藤田和史編『和歌山大学フィールドミュージアム叢書4 わかやまを学ぶ—紀州地域学 初歩の初歩』(清文堂出版、2017・3)、大橋直義編『根来寺と延慶本『平家物語』—紀州地域の寺院空間と書物・言説』(勉誠出版、2017・7)。

(2) 大橋直義「道成寺建立縁起」考(前掲注1『わかやまを学ぶ』)、大橋直義「中世文学研究と「歴史学」の交錯」(松田浩・他編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、2017・6)。

(3) 「道成寺古文書目録」(御坊文化財研究会編『あかね』27号、2001・9)。

(4) 和歌山県川辺町編、1985～1991。その他、報告書の類には『重要文化財 道成寺本堂・仁王門修理工事報告書(本文編・図版編)』(和歌山県文化財センター、1991)、『道成寺調査報告書』(和歌山県教育委員会、2012)がある。

(5) 前掲注3『あかね』目録が対象にしたのはこれらの大半。しかしながら、調査に漏れた函もある一方、現在は所在が分からなくなってしまっている函・文書も複数存在し、それらの探索を継続しつつ、現状にそくした目録の再編が急務である。

(6) 『熊野那智大社文書』米良文書別集1108号、永享七年(1435)3月21日付「滝本執行有職補任状」。阪本敏行『熊野三山と熊野別当』(清文堂出版、2005・8)。能「黒塚」。

ホノルル美術館リチャード レイン コレクションの「鉢かづき」

小林 健二（国文学研究資料館教授）

前号で入口敦志氏が報告した「大坂物語」がそうであったように、リチャード レイン氏は大量の絵入りの版本を収集したが、同じ作品でも同版・別版を問わず、また揃ったものばかりでなく端本であっても出来るだけ集める方針であったようだ。その収書の特徴が版本研究の資料として非常に有効であることは入口氏の述べるとおりである。今回は、レイン コレクションに所蔵されるお伽草子の「鉢かづき」を取り上げてその資料的価値について若干の報告をしたい。

*

継子いじめの代表的な物語である「鉢かづき」は、写本・版本を合わせて沢山の伝本がある。筆者は、かつて大阪府寝屋川市の『寝屋川市史』第9巻「鉢かづき編」（平成19年刊）の編纂に関わり、お伽草子の「鉢かづき」の諸本を出来るだけ披見し、分類・整理を行った。詳しくは『寝屋川市史』を御覧いただきたいが、絵入り整版本に限って見ると、古活字版を除いてⅡ類-（二）種のロ系統かハ系統の大きく二系統に分類できる。

刊年がわかる絵入り整版の伝本を、刊行順にあげると次のようになる。行頭の記号ロ・ハは分類系統を示す。

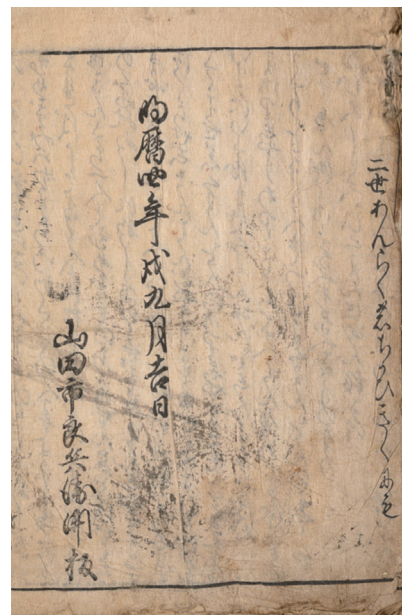
- ロ 万治二（1659）刊 大二冊 高橋清兵衛刊
- ハ 万治二（1659）刊 大二冊 松会刊
- ハ 寛文六（1666）刊 大二冊 山本九左衛門刊
- ハ 寛文六（1666）刊 大二冊 松会刊
- ハ 延宝四（1676）刊 大二冊（刊行者名削除）
- ハ 延宝四（1676）刊 大二冊 大谷仁兵衛刊
- ハ 延宝四（1676）刊 大一冊 万屋庄兵衛刊
- ロ 貞享元（1684）刊 半一冊 作本屋八兵衛刊
- ロ 元禄十一（1698）刊 大一冊 吉野屋権兵衛刊
- ロ 宝永二（1705）刊 大二冊 和泉屋茂兵衛刊
- ハ 宝永七（1710）刊 大一冊 井筒屋三右衛門刊

この他に、版元や刊年が刻まれない（あるいは削られた）本もあるが、ここでは刊年が明確なものだけをあげた。これだけでも17世紀半ばから18世紀初めにかけて沢山の「鉢かづき」の絵入り版本が出版されたことがうかがえよう。

* *

さて、リチャード レイン コレクションには端本も含めて約10本の絵入り整版「鉢かづき」が所蔵されるが、驚い

たのは「明暦四年戊九月吉日／山田市良兵衛開版」の刊記【図版1】を持つ絵入りの大本下巻一冊があったことである。かなり草臥れているが元装を保っており、題簽は書名を判読できるくらい残っている（「□ちかつ□」とかろうじて読める）し、摺りもなかなか良好である。



【図版1】明暦版刊記

明暦四年（1658）本（以下、明暦版）がどんな意味を持つかは、先の一覧に加えてみると明らかであろう。つまり刊年の明らかな絵入り整版本として最も古い本が出現したことになる。

ちなみに、版元の山田市郎兵衛は、承応から寛文年間にかけて出版活動をしていた京都寺町通二条上ルの書肆で、お伽草子や舞の本を万治元年九月、すなわち明暦四年九月に刊行しており、この「鉢かづき」もその一つと考えられる。

* * *

明暦版の内容を他本と比較検討すると、本文・挿絵ともにロ系統の宝永二年（1705）和泉屋茂兵衛刊本と同版であり、和泉屋茂兵衛版は明暦本を求版したことがわかる。諸版と比べてもう一つ気づいたことは、ハ系統に属する延宝四（1676）刊の刊行者名削除本（以下、延宝版）と挿絵の図様がほぼ同じことであった。このことは、挿絵に関しては早い時点でロ系統とハ系統の接触があったことを推測させるが、ただし、よく見ると相違する部分も見られる。

最終の挿絵は、長谷寺に参詣した鉢かづき姫の若君達を、旅の修行僧に身をやつした姫の父が見て、姫の面影に似ていると涙を流している場面で、この後に姫と父は再会をして物語は大団円となる。一見すると同じ図様のように見えるが、明暦版【図版2】では父親は寺の縁の下に座して居る

のに、延宝版【図版3】では縁側の上に座っており、明暦版で父が居た場所には駕籠と煙管に火をつける二人の駕籠掻きが描かれている。この物語の時代に駕籠屋がいるのは不自然で、図柄としては明暦版が先行するといえよう。

さらに明暦版では若君の右に「さいしやうとの、御きんたち（宰相殿の御公達）」と画中詞があるが、延宝版では無くなっている。そして明暦版の父の右隣に「さね高しゆきやうしや（実高修行者）」と刻まれるのが、延宝版では「さね高」とだけになっている。これも明暦版にあったものが延宝版で省略されたと考えられよう。



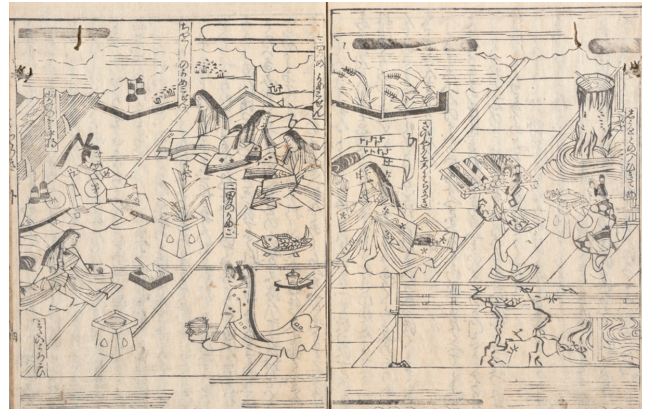
【図版2】明暦版 10丁表



【図版3】延宝版 9丁表

つまり、挿絵自体は明暦版の方が延宝版の図様より先行していると認められるのであるが、ここに一つの大きな問題が出てくる。延宝版では、嫁比べの場面を描いた挿絵【図版4】が、第3丁裏と第4丁表にわたって見開きで展開するのに対して、明暦版では、第2丁裏【図版5】と第7丁表【図版6】と分かれて置かれていることである。これは図版を見ていただければわかるように、右の挿絵に嫁比べに向かう鉢の取れた鉢かづき姫が、左の挿絵にはそれを待つ宰相の両親と宰相の兄嫁達が描かれているのであり、見開きで連続して置かれることにより嫁比べの場面であることが認識できる図様となっている。

それに対して、明暦版では、第2丁裏【図版5】と第7丁表【図版6】と離して置いているのであり、物語の展開に沿わない挿絵構成となっているのである。挿絵の位置に関しては、延宝版の方が本来の形態であり、延宝版より以前に刊行されたはずの明暦版において、この見開きの挿絵をわざわざ切り離して置く処置がなされていたと考えざるをえない。そして、このことは明暦版以前に延宝版の挿絵構成を持った版があったことを推測させるのである。



【図版4】延宝版3丁裏・4丁表（見開き）



【図版5】明暦版2丁裏



【図版6】明暦版7丁表

* * * *

これまでのことをまとめると、リチャードレインのコレクションには、新出の明暦四年吉田市良兵衛刊「はちかづき」の下巻があり、今のところ絵入り整版では最も古い一本と認められる。その版式は宝永二年版と同版で口系統に属するが、挿絵はハ系統に属する延宝四年版の挿絵もほぼ同じであり、挿絵においては早くから口系統とハ系統の交渉があったことがうかがわれる。また、延宝四年版では第3丁裏・第4丁表（見開き）になっている嫁比べの挿絵が、明暦四年版では第2丁裏・第7丁表と分けて載せられており、挿絵の構成においては明暦版以前にさかのぼる版があったことが推測できる。

以上のようなことが判明するのであり、リチャードレインコレクションの明暦四年刊本を加えることにより、「鉢かづき」の絵入り版本諸本の調査研究は新たな段階に入ったと言えるのである。

※図版はいずれもホノルル美術館蔵 リチャードレインコレクション中の「鉢かづき」。

〈日本バチカン国交樹立 75 周年〉 研究集会「バチカン図書館所蔵切支丹関係文書の魅力を探る」



2017年7月1日、「日本バチカン国交樹立75周年」を記念して、研究集会「バチカン図書館所蔵切支丹関係文書の魅力を探る」が国文学研究資料館を会場に開催されました。来賓としてご参加いただいた駐ローマ法王庁特命全権大使ジョセフ・チェノットウ大司教は、挨拶において日本とバチカンの歴史に触れ、バチカン図書館が所蔵する切支丹文書の共同調査研究が両国の交流においては勿論、世界の人々への大きな貢献になるとプロジェクトへの期待を寄せられました。人間文化研究機構立本成文機構

館ロバート キャンベル館長はマレガ・コレクションとこれまでの当館との関係についてそれぞれ紹介されました。

バチカンの共同研究は、『国文研ニュース』第38号・第46号などにすでに紹介がありますが、2011年、バチカン図書館で切支丹関係文書1万数千点が発見されたことを受け、2013年に同図書館と人間文化研究機構とが協定を結び、国文学研究資料館が統括機関となり、東京大学史料編纂所・大分県・臼杵市などと協力して、文書群の概要調査・保存措置・画像作成といった作業を進めてきました。まだ道半ばの段階ですが、現在では資料全体の6割ほどの画像作成が済み、文書内容の詳細も明らかになりつつあります。集会は、こうした進捗を踏まえてマレガ文書群の魅力を広く紹介することを目的に開催されたものです(東京でははじめての研究集会)。

当日のプログラムは、全体を2部構成として、第1部ではマレガ文書群に関わる全体的な概要を示すことを目的に、大友一雄「プロジェクトの進捗とその可能性」がプロジェクトの目的や進捗について、佐藤晃洋「マレガ文書群の概要」がマレガ文書群の全体像を伝来や文書システムなどとの関わりで紹介しました。

第2部では、マレガ文書群の魅力、可能性を探るうえで基本的な報告が用意されました。シルヴィオ・ヴィータ「マリオ・マレガ神父のキリシタン研究とその位置付—地元の民間学及び大正・昭和のキリシタン像を中心に—」は、文書群を収集したマレガ神父の20世紀前半期の諸活動を内外の資料を縦横に駆使して分析し、国際的・地域的な動向のなかでマレガの存在を位置づけました。これまで知られていない神父の日本での活動が解明されています。三野行徳「臼杵藩宗門方役所とキリシタン統制」は、マレガ文書群の大半の出所となる臼杵藩宗門方役所と同藩の切支丹統制の仕組みの変遷を、転びキリシタンやその子孫である類族の生存人数なども示しながら検討したものです。今後、禁教政策を検討する上での基本的な情報が提供されたといえます。大橋泰幸「キリシタン類族改制度と村社会—臼杵藩の場合—」は、領主・近隣住民からも厳しい監視の目を向けられたと理解されてきた類族の婚姻関係や養子縁組など、主にライフサイクルのなかでの実態を、地域に残された文書なども利用して丁寧に分析し、従来指摘されるような異端視状況は確認できないことを実証されました。新たな分析視角を提示したということができそうです。

三野報告は権力と宗教・信仰の観点から史的展開を論じ、大橋報告は社会認識の観点から類族を捉え直し、ヴィータ報告は、20世紀の宣教師の活動を通じて、切支丹の研究の同時代的特徴を追究しています。いずれも今後の調査・研究のうえで欠かせぬ視角になりそうです。また、各報告とも、マレガ文書のみならず、地域に残された臼杵藩関係文書(稲葉家文書)、地域文書(村役人文書など)などの活用を進めている点も大きな特徴です。大分県立先哲史料館(大分県教育庁)、臼杵市はじめ関係の市町村との連携をさらに進めることが、プロジェクトにとって重要となります。

当日は、歴史研究者・キリスト教関係者(サレジオ会など)・一般の方々など120名が参加され、太田尚宏氏の司会のもとで行われた質疑では、岡美穂子氏のコメントをはじめ、活発な質問・意見が飛び交いました。報告・質疑などを通じて、改めてマレガ文書群の魅力とその可能性について伝えることができたように思います。最後にバチカン図書館での保存修復活動に関する研究や、一層のマレガ文書研究、地域と連携した研究、多国間比較研究などの方向性が示され、閉会となりました。

なお、本研究集会は、人間文化研究機構の日本関連在外資料調査研究・活用事業「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」(代表大友一雄)などによるものです。(大友 一雄)

特別展示「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」関連のお知らせ

2017年10月11日(水) から12月16日(土) まで開催中の特別展示「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」のイベントや鉄心斎文庫関連の情報をお知らせします。

◇芦澤美佐子氏が紺綬褒章受章

このたび、鉄心斎文庫寄贈者である芦澤美佐子氏に、日本政府より紺綬褒章が授与されました。紺綬褒章とは「公益のために私財を寄附し功績顕著なる者」に授与される褒章です。一千点の伊勢物語コレクションの寄贈に対する感謝の意をこめて、当館より文部科学省へ褒章の授与を上申し、閣議決定を経て、去る6月30日(金) に章記・褒章の伝達がおこなわれました。

改めて素晴らしいコレクションの寄贈に心より感謝申し上げるとともに、今後の研究・公開・保存に一層努めてまいります。

◇芦澤信二・美佐子ご夫妻レリーフの紹介



当館展示室の入口を入った右側の壁面に掲げている芦澤信二・美佐子ご夫妻の銅板レリーフをご存知でしょうか。こちらはこの春、鉄心斎文庫寄贈への感謝を込めて、昭和57年(1982)のご夫妻の写真(『天愛不息－芦澤信二を偲ぶ－』掲載)をもとに作成しました。

特別展示とともに、お二人の仲睦まじい様子のレリーフをぜひご覧ください。

◇特別展示「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」関連イベント

特別展示に関連して、以下のイベントを催します。

○ギャラリートーク

展示室内において、当館教員が展示の見どころを解説するギャラリートークをおこないます。事前申し込み不要ですので、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

10月11日(水) 11時30分～12時15分 担当: 小林健二

11月2日(木) 11時30分～12時15分 担当: 小山順子

12月7日(木) 11時30分～12時15分 担当: 恋田知子

○伊勢物語セミナー

展示品への理解をより深めていただけるよう、ギャラリートークと同日に、『伊勢物語』に関するセミナーを開催します。当館教員・客員教員の専門をいかし、『伊勢物語』の魅力や享受について解説をおこないます。

*セミナーは事前申し込み制。受付は終了しました。

10月11日(水) 13時30分～15時30分

講師: 山本登朗(関西大学教授・当館客員教授)、恋田知子

場所: 国文学研究資料館2階オリエンテーション室

11月2日(木) 13時30分～15時30分

講師: 小林健二、小山順子

場所: 国文学研究資料館2階オリエンテーション室

(恋田 知子)

日本文学資源の発掘・活用プロジェクト始動

10月1日より、当館の新事業が始まります。文化庁からの委託事業で、日本文学資源の発掘・活用プロジェクトです。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、今後、より積極的に日本文化を発信してゆくことが求められます。当館でも、国内外に向けて日本古典文学を発信してゆく事業に取り組むことになりました。

当館ではこのプロジェクトを、二つの大きな柱をもって推進していきます。一つ目は、古典インタプリタの活用です。自然科学の分野では、2005年頃から博物館や科学館、大学で、サイエンス・インタプリタ、サイエンス・コミュニケーターの人材育成が進められ、科学と社会をつなぐ架け橋として活動を行ってきました。こうした人材は、科学の魅力や面白さを広く社会に伝えるとともに、一般社会が研究者に対してどういったことを求めているのかを伝えることも重要で、いわば双方向のコミュニケーションを可能にする存在として捉えられています。こうしたインタプリタ、コミュニケーターを、古典文学の分野でも作りたい。今後、幅広い活躍をしてもらうため、新たな人材を採用し、一般社会への普及活動や国内外での企画発信を行っていきます。

もう一つの柱は、レジデンスプログラムです。国文学研究資料館を拠点として、これまでに蓄積された資料や研究成果を活用した作品を発表してもらおうという企画です。アーティスト・イン・レジデンスとして様々な分野で活躍するクリエイターを、またトランスレーター・イン・レジデンスとして翻訳家を当館の客員として招聘し、新しい作品の創作に取り組んでいただくこととなります。

どちらのプログラムも、これまで当館が開設以来取り組んできた事業にもとづき、蓄積してきた古典籍資料や研究者としての知見を効果的に利活用してゆく、もしくは効果的に活用できる企画を立てること、またそれを社会に還元しより広い対象に日本古典文学の魅力を知ってもらうことを目指しています。現在、細部の調整を行っているところです。次号では、より詳細な情報をお伝えできることと思います。新事業にご期待下さいませ。 (小山 順子)

子ども霞が関見学デー



2017年(平成29)8月2・3日の両日「子ども霞が関見学デー」が開催されました。「子ども霞が関見学デー」は、毎年夏休みに子どもたちを対象として、各府省庁の業務紹介、社会体験を目的に実施されています。当館を含む人間文化研究機構の6機関も、毎年文部科学省の一角でこのイベントに参加しています。例年、多くの親子連れに足を運んでいただいております。今年も、6,104人の入場者を迎えることができました。

当館のブースでは、江戸時代の典籍の原本や源氏物語絵巻の複製を展示しました。江戸時代の和本をおそろおそろ手にとった子どもたちからは、「この紙は書道の半紙と同じなの」、「何が書いてあるの」、「この穴は虫に食べられたの」、「みんなこんな文字読めたの」などと次々に質問が飛んできました。中には、長時間立ち止まってじっくりと読んでいる子もいました。卷子本を見るのが初めての子も多かったようで、ぐるぐると広げながら、「ながーい」、「きれい」、「忍者の巻物と同じだね」とユニークな感想をもらっていました。

また、お土産用に、百人一首・江戸時代の花火などのプリントを用意しました。特に好評だったのが、町の飲食店の看板から探したくずし字をクイズ形式にしたものです。「うなぎ」のくずし字が読めても、「生そば」は読めずくやしがる子。全問正解して喜ぶ子などさまざまでしたが、私たちの身の回りにくずし字が残っていることに気づいてもらうよい機会になったと思います。

昨年に引き続きこのイベントに参加しましたが、今年も一日中子どもたちに圧倒されっぱなしでした。この催しものを通じて、未来を担う子どもたちに少しでも歴史的な典籍・資料に関心をもってもらえたならば幸いです。(宮間 純一)

津軽デジタル風土記、はじめの一步 ―調印式・記念講演レポート―



調印式の様子

平成29年7月15日(土)、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにて、「津軽の魅力と文化を世界に発信! -古典籍・歴史資料のデジタル公開に向けて-」と題し、「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクトの推進に関する覚書の締結式ならびに記念講演会が開催された。「津軽デジタル風土記」とは、当館が中心となって推進している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」で実施する「文献観光資源学」の柱となる事業である。津軽の複数の機関と協力体制を築きながら、今後3年の間に新たなデジタル資料の利活用のあり方を提示していく意欲的な計画であり、この締結式はその船出となる重要な意味をもつ。

当日は、弘前大学理事(研究担当)・副学長の開会のことばに続き、当館副館長谷川恵一氏による、「歴史的典籍NW事業における文献観光資源学の取組」、さらに弘前大学教職大学院教授瀧本壽史氏による「『津軽デジタル風土記』構築への取組」という、本プロジェクトの概要説明がなされた。要点としては、従来、紙媒体で限られた場所(個人、研究機関、大学など)に集中していた地域資史料、すなわち書籍・古地図、さらには固定的な碑文などをもデジタル化しアクセスを容易にするとともに、紙媒体と併用することによって再資源化していこう、というものである。地域の価値を再発見していくためのユーザ参加型ツールを構築しながら、現代の視点から地域情報を再統合する、これが本プロジェクトの理念である。

つづいて、プロジェクト参加機関である弘前市教育委員会・弘前大学教育学部・弘前大学人文社会科学部・青森県立郷土館、そして国文学研究資料館の各長が壇上一同に会し、調印式が行われた。それぞれの有する資料とこれまで培ってきた実績を合わせることで、新たなデジタル環境の構築、そしてそれを地域の資源として生かしていく、そのような期待に満ちあふれていた。

以上が第一部であるが、第二部では、弘前大学名誉教授長谷川成一氏による「森林資源の活用から見た近世津軽-白神山地・岩木川・弘前城下-」、当館館長ロバート キャンベル氏による「『弘前藩庁日記』に刻まれた江戸のリアリティ」の二つの記念講演が行われた。それぞれ、津軽に関する資料に基づきながら歴史と文化双方に触れる興味深い内容であったが、前者は山鹿素行の津軽領観という「他者の目」(外から見た目)に触れながら、津軽の自然、とりわけ材木の特色とそれに関わる人々の営為について、一方後者は、津軽の藩校・稽古館教授黒滝藤太が昌平齋において遭遇した殺人事件を『弘前藩庁日記』から再現するという、津軽から「外への目」を通じた点で両者が呼応しているようであった。

この後、記者会見も開かれたが、そこでは、本プロジェクトがこれまで大学が行ってきた活動の延長上にある「時宜を得たもの」であり、まさに機が熟したとの発言や、発信はもちろん、「交信」(コミュニケーション)が求められているとのコメントもあった。また、本プロジェクトがなぜ津軽を対象としたのか、という新聞記者からの質問に対し、当館館長が「組織の域を超えられる文化的土壌があったこと」と応じた点は、当日の調印の実現を象徴する言葉であったように思う。



翌日は、各自関連機関を巡見したが、筆者は青森県立郷土館を訪れ、改めて津軽の資料の多彩さと面白さを実感した。

スタートしたばかりで未知数な部分が多いものの、既成の価値観に縛られずに、資源を活きたものとして利活用できる「場」と具体的な提案を、参加機関のスタッフがチームとして築きあげていきたいと考えている。

(木越 俊介)

第41回国際日本文学研究集会プログラム

第41回国際日本文学研究集会

主催：国文学研究資料館

平成29年11月11日(土)

受付開始 13:00~

総合司会 ^{TANKAWA} 谷川 ^{Keiichi} 恵一 (国文学研究資料館副館長)

開会挨拶 ロバート キャンベル (国文学研究資料館長) 13:30~13:40

【第1セッション】 司会 ^{NAKAMURA} 中村 ^{Tomoe} ともえ (静岡大学准教授)

研究発表

- [1] 朔太郎のセンチメンタリズムにおける「身体」の意味を考える
CAPPONCELLI Luca (イタリア国立カタニア大学講師) 13:40~14:10
- [2] 中上健次「浄徳寺ツアー」における〈語り〉の試み
^{MATSUMOTO} 松本 ^{Kai} 海 (早稲田大学大学院博士課程) 14:10~14:40
- [3] 多文化的なテキスト：阿部和重の初期作品における「エクリチュール」をめぐって
ROEMER Maria (ハイデルベルグ大学博士課程) 14:40~15:10

休憩 (20分) 15:10~15:30

【対談】多和田 葉子 × ロバート キャンベル

「蛸、出て来い。」ついそちらへ歩いて行ってしまう人々の物語

ディスカッサント ^{KONO} 河野 ^{Shien} 至恩 (上智大学准教授) 15:30~17:10

平成29年11月12日(日)

受付開始 10:00~

総合司会 ^{SAITO} 齋藤 ^{Maori} 真麻理 (国文学研究資料館教授)【第2セッション】 司会 ^{UNNO} 海野 ^{Keisuke} 圭介 (国文学研究資料館准教授)

研究発表

- [4] 古代日本における地理書～『和名類聚抄』所引『宜都山川記』をめぐって
MANIERI Antonio (イタリア国立ナポリ東洋大学研究員) 10:30~11:00
- [5] 林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値 — 講述聞書における校合の実態をめぐって—
^{ZHANG} 張 ^{YanJun} 硯君 (大阪大学大学院博士課程) 11:00~11:30
- [6] UCLA 梅尾コレクションの研究 覚城院旧蔵書の視点から
^{IKIURA} 幾浦 ^{Hirovuki} 裕之 (早稲田大学大学院博士課程) 11:30~12:00

休憩 (120分) 昼食・ポスターセッション 12:00~14:00

【ポスターセッション】 平成29年11月12日(日) 12:00～14:00

※11月11日(土) 13:30から11月12日(日) 15:00まで掲示しています。

●大地としての生命力—三島由紀夫古典主義期の作品における「下層への動き」—

TENG Mengwei
滕 夢激 (東京外国語大学博士課程)

●狂歌と彗星—『古今夷曲集』考

OUCHI Mizue
大内 瑞恵 (東洋大学非常勤講師)

●西周著「百学連関」にみる芸術理解について

EZAKI Kimiko
江崎 公子 (元国立音楽大学准教授)

●法華寺蔵『七草絵巻』考—孝子譚の側面から—

YOKOYAMA Eri
横山 恵理 (大阪工業大学特任講師)

【ショートセッション】 司会 NOAMI Mariko 野網 摩利子 (国文学研究資料館准教授)

① 男が詠む「待恋」—『百人一首』翻訳論

KÁROLYI Orsolya (同志社女子大学大学院博士課程) 14:00～14:15

② 蕉風俳諧における「恋句」の特色

KIM Mee-Kyung
金 美京 (筑波大学大学院博士課程) 14:15～14:30

休憩 (15分) 14:30～14:45

【第3セッション】 司会 DAVIN Didier (国文学研究資料館准教授)

研究発表

[7] 並木正三の作品における人物造形

CHEN Mengyang
陳 夢陽 (早稲田大学大学院博士課程) 14:45～15:15

[8] 貸本屋大惣の改装表紙から見る文化・文政・天保期間の合巻の仕入れ状況

McGEE Dylan (名古屋大学准教授) 15:15～15:45

[9] 戦時下の小説にみる〈歌〉の役割—<12月8日小説群>を中心に—

LIAO Hsiuchuan
廖 秀娟 (台湾元智大学准教授) 15:45～16:15

総括 16:15～16:30

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成30年4月入学 入学者募集 <http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/outline.html>

日本文学研究専攻の平成30年度の入学者を、下記のとおり募集します。恵まれた研究環境のもとで研究できる当専攻への出願をお待ちしております。

- ・募集人数：博士後期課程 3名
- ・取得できる学位：博士（文学）
- ・願書受付期間：平成29年11月24日（金）～30日（木）

今年度の専攻概要ができあがりました。
教員の研究内容や院生室の紹介等を掲載しています。



お問い合わせ先（学生募集要項請求先）
国文学研究資料館 総務課 教育支援係
E-mail: edu-ml1@nijl.ac.jp
TEL: 050-5533-2915

○修了生が総合研究大学院大学研究賞を受賞

平成28年度修了の糸 汐里さんが、総合研究大学院大学研究賞を受賞しました。この賞は優秀な学生の研究を奨励し、先導的な学問分野を開拓するために設けられた賞で、年に1回、長倉研究奨励賞と並び表彰されるものです。

***** 受賞のコメント 糸 汐里 *****

今回、思いがけず総合研究大学院大学研究賞をいただき、たいへん光栄に存じます。このような名誉ある賞をいただくことができたのは、ひとえに、これまで指導してくださった国文学研究資料館の先生方、学部・修士時代を過ごした立教大学の先生方、研究会の先生方のお導きのおかげです。また、職場の同僚の理解や、共に研鑽を積む仲間の励まし、さらに家族の助けがなければ、博士論文を提出することもかなわなかったかもしれません。提出までの長期間に渡り支えてくださったみなさまに、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

私が研究対象とする説経、古浄瑠璃は、国文学研究において、研究者人口の少ないジャンルの一つです。現存する資料も極めて少ないのですが、国内外の資料が集積する国文学研究資料館で学んだことで、これまで見過ごされてきた資料との影響関係など、従来と異なる知見を得ることができました。また先生方の調査に同行し、実際の古典籍に触れることで見出した発見も数えきれません。卒業してもなお、私の勉強に欠くことのできない場所です。

亀の歩みではありますが、ささやかな成果を積み重ねて参りたいと思いますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



最終審査の1つであるポスタープレゼンテーションの様子

11月							12月							1月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4						1	2		1	2	3	4	5	6
5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30			24/31	25	26	27	28	29	30	28	29	30	31			

- 開館 : 9:30～18:00 ● 請求受付 : 9:30～12:00, 13:00～17:00 ● 複写受付 : 9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 : 9:30～17:00 ● 請求受付 : 9:30～12:00, 13:00～16:00 ● 複写受付 : 9:30～16:00

展示スケジュール (11月～1月)

特別展示「伊勢物語のかがやき 一鉄心斎文庫の世界」
 会期 10月11日(水)～12月16日(土)
 ※休室日
 日曜・祝日、展示室整備日(11月22日)

通常展示「和書のさまざま」
 会期 2018年1月15日(月)～5月下旬
 ※休室日
 日曜・祝日、展示室整備日(2月14日、3月14日、3月31日)

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。

◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。
<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>

表紙絵資料紹介

「業平涅槃図」山崎龍女筆

〔江戸中期〕写。74.1×37.4cm、絹本着色、軸装一幅。

伊勢物語の主人公・在原業平の死を釈迦の涅槃に見立てた肉筆浮世絵で、江戸時代に盛行した「変わり涅槃図」のひとつ。変わり涅槃図とは、法然や日蓮、歌舞伎役者など高僧や著名人を釈迦に置き換え、その死を嘆く人びとを周囲に描いた仏涅槃図のパロディ。仏涅槃図では、釈迦の死を嘆いて男女を問わず多くの人や動物が集まるが、色好みの貴公子業平の場合、集まるのは女性ばかり。時代も身分もさまざまで、王朝風の姫君や当世風の物売り、尼僧の姿も見える。さらに動物までも牝である。かつて虎は牡、豹は牝と認識され、仏涅槃図では対で描かれたのに対し、ここでは豹のみを描き、牝であることを示す。つがい描かれる鹿や鶴、鴛鴦も1羽しか描かれず、明らかに牝を描こうとしている。



本図は「山崎氏女龍画印」の落款から、山崎龍女の筆と判断される。龍女は旗本同心山崎文右衛門の娘で、生没年は未詳であるが、女性浮世絵師として享保期に活躍した。構図や描写などは英一蝶(1652～1724)筆「業平涅槃図」と共通し、龍女はこれを直接参考にしたようである。龍女と一蝶のかかわりは不明だが、一蝶の図像を反転させたり、女性や動物を増やすなど、龍女独自の工夫も見える。付属の木箱には山東京伝と京山の享和元年(1801)の箱書があり、この絵を享保(1716～36)初めの作と推定する。

2016年当館に寄贈された鉄心斎文庫資料の一点(請求番号98-1084)。2017年10月11日から12月16日まで、当館開催の特別展示「伊勢物語のかがやき一鉄心斎文庫の世界」にて陳列中。ぜひ実物をご覧ください。(恋田 知子)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日 平成29年(2017)10月16日
 編集 国文学研究資料館企画広報室
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館